

平成17年度2次募集解答

桑島淳宏
解答確認
斎藤 高

平成17年6月28日

1

最下点出の速さを v_0 とすると、力学的エネルギー保存則より、

$$\frac{1}{2}mv_0^2 = mgL \quad (1)$$

$$v_0^2 = 2gL \quad (2)$$

最下点から右回りを正に θ をとると、質点の向心方向の運動方程式は、系の張力を T として、

$$m\frac{v^2}{r} = T - mg \cos \theta \quad (3)$$

また、力学的エネルギーの保存則より、角度 θ の位置での速さを v として、

$$\frac{1}{2}mv^2 + mgr(1 - \cos \theta) = \frac{1}{2}mv_0^2 \quad (4)$$

(3),(4) より、 v を消去して、

$$T = m\frac{v_0^2}{r} - mg(2 - 3 \cos \theta) \quad (5)$$

円運動を行うためには、 $T \geq 0$ かつ、 $v^2 > 0$ でなければならないので、

$$\begin{cases} v^2 = v_0^2 - 2gr(1 - \cos \theta) > 0 \\ T = m\frac{v_0^2}{r} - mg(2 - 3 \cos \theta) \geq 0 \end{cases} \quad (6)$$

任意の θ で (6) が成り立つには、 $\theta = \pi$ で成り立てばよい。従って、(6) より、

$$\begin{cases} v_0 > \sqrt{4gr} \\ v_0 \geq \sqrt{5gr} \end{cases} \quad (7)$$

よって、

$$v_0^2 \geq 5gr \quad (8)$$

である。

$r = L - d$ として、(2) を代入して d について解くと、

$$d \geq \frac{3}{5}L \quad (9)$$

(9) が円運動をするための d にたいする条件である。

2 1.

ガウスの法則の微分形は、

$$\operatorname{div} \mathbf{D} = \rho \quad (1)$$

問題より、 $\operatorname{rot} \mathbf{H} - \frac{\partial \mathbf{D}}{\partial t} = \mathbf{i}$ であるから、発散をとると、

$$\operatorname{div} \operatorname{rot} \mathbf{H} - \operatorname{div} \frac{\partial \mathbf{D}}{\partial t} = \operatorname{div} \mathbf{i} \quad (2)$$

ここで、 $\operatorname{div} \operatorname{rot} \mathbf{H} = 0$ 、 $\operatorname{div} \frac{\partial \mathbf{D}}{\partial t} = \frac{\partial}{\partial t} \operatorname{div} \mathbf{D}$ 、であるから、

$$\operatorname{div} \mathbf{i} + \frac{\partial}{\partial t} \operatorname{div} \mathbf{D} = \operatorname{div} \mathbf{i} + \frac{\partial \rho}{\partial t} = 0 \quad (3)$$

2.

今、 r_q の位置にある電荷が r につくる電場 \mathbf{E} は、 $t = 0$ で、 $r_q = 0$ とすると、

$$\mathbf{E} = \frac{q}{4\pi\epsilon_0} \frac{\mathbf{r} - \mathbf{r}_q}{|\mathbf{r} - \mathbf{r}_q|^3} \quad (4)$$

r_q は、 $|\mathbf{v}| = v$ となる、 \mathbf{v} を用いて、 $r_q = \mathbf{v}t$ と表されるから (\mathbf{v} は、定ベクトル)、

$$\mathbf{E} = \frac{q}{4\pi\epsilon_0} \frac{\mathbf{r} - \mathbf{v}t}{|\mathbf{r} - \mathbf{v}t|^3} \quad (5)$$

よって、電荷密度 \mathbf{D} は、

$$\mathbf{D} = \epsilon_0 \mathbf{E} = \frac{q}{4\pi} \frac{\mathbf{r} - \mathbf{v}t}{|\mathbf{r} - \mathbf{v}t|^3} \quad (6)$$

今、 \mathbf{H} は、存在しないので、 $\operatorname{rot} \mathbf{H} = 0$ である。

$\mathbf{i} = -\frac{\partial \mathbf{D}}{\partial t}$ だから、(6) より、

$$\mathbf{i} = -\frac{q}{4\pi} \frac{d}{dt} \frac{\mathbf{r} - \mathbf{v}t}{|\mathbf{r} - \mathbf{v}t|^3} \quad (7)$$

$$= \frac{q}{4\pi} \left\{ -\frac{\mathbf{v}}{|\mathbf{r} - \mathbf{v}t|^3} + \frac{3(\mathbf{r} - \mathbf{v}t)[\mathbf{v} \cdot (\mathbf{r} - \mathbf{v}t)]}{|\mathbf{r} - \mathbf{v}t|^5} \right\} \quad (8)$$

である。

3

1)

 $f(x) = e^{\hat{A}x} e^{\hat{B}x}$ とおく。両辺を x で微分すると、

$$\frac{d}{dx} f(x) = \hat{A} e^{\hat{A}x} e^{\hat{B}x} + e^{\hat{A}x} \hat{B} e^{\hat{B}x} \quad (1)$$

両辺に右から、 $e^{\hat{A}x} e^{-\hat{A}x} f(x)$ を作用させると、

$$\frac{d}{dx} f(x) = (\hat{A} + e^{\hat{A}x} \hat{B} e^{-\hat{A}x}) f(x) \quad (2)$$

ここで、Baker-Hausdorff の関係より、

$$e^{\hat{A}x} \hat{B} e^{-\hat{A}x} = \hat{B} + x[\hat{A}, \hat{B}] + \frac{x^2}{2!} [\hat{A}, [\hat{A}, \hat{B}]] + \dots \quad (3)$$

であるから (2) は、

$$\frac{d}{dx} f(x) = (\hat{A} + \hat{b} + [\hat{A}, \hat{B}]x) f(x) \quad (4)$$

である。(与えられた交換関係を用いた。)

(4) の微分方程式の解は $f(x) = e^{\hat{A}+\hat{B}} e^{\frac{1}{2}[\hat{A}, \hat{B}]x^2}$ であり、 $x = 1$ として右から $e^{-\frac{1}{2}[\hat{A}, \hat{B}]}$ を作用すれば、

$$\exp(\hat{A} + \hat{B}) = \exp \hat{A} \exp \hat{B} \exp\left(-\frac{1}{2}[\hat{A}, \hat{B}]\right) \quad (5)$$

である。

2)

 $\hat{U}(a)$ に 1) の関係式を使うと、

$$\hat{U}(a) = \exp\left(\frac{a}{\sqrt{2x_0}} \hat{a}^\dagger\right) \exp\left(-\frac{a}{\sqrt{2x_0}} \hat{a}\right) \exp\left(\frac{a}{2\sqrt{2x_0}}\right) \quad (6)$$

従って、

$$|0(a)\rangle = \hat{U}(a)|0\rangle \quad (7)$$

$$= \exp\left(\frac{a}{2\sqrt{2x_0}}\right) \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} \left(\frac{a}{\sqrt{2x_0}}\right)^n (\hat{a}^\dagger)^n \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} \left(\frac{a}{-\sqrt{2x_0}}\right)^n (\hat{a})^n |0\rangle \quad (8)$$

 $\hat{a}|0\rangle = 0$ であるので、(8) は、

$$|0(a)\rangle = \exp\left(\frac{a}{2\sqrt{2x_0}}\right) \sum_{n=0}^{\infty} \left(\frac{a}{\sqrt{2x_0}}\right)^n \frac{1}{\sqrt{n!}} \frac{1}{\sqrt{n!}} (\hat{a}^\dagger)^n |0\rangle \quad (9)$$

$$= \exp\left(\frac{a}{2\sqrt{2x_0}}\right) \sum_{n=0}^{\infty} \left(\frac{a}{\sqrt{2x_0}}\right)^n \frac{1}{\sqrt{n!}} |n\rangle \quad (10)$$

(11) が求める展開式である。

3)

問題で与えられた $|n\rangle$ に、 \hat{a} を作用させると、

$$\hat{a}|n\rangle = \frac{1}{\sqrt{n!}}\hat{a}(\hat{a}^\dagger)^n|0\rangle \quad (11)$$

$$= \frac{1}{\sqrt{n!}}\hat{a}\hat{a}^\dagger(\hat{a}^\dagger)^{n-1}|0\rangle \quad (12)$$

$$= \frac{1}{\sqrt{n!}}(\hat{a}^\dagger\hat{a} + 1)(\hat{a}^\dagger)^{n-1}|0\rangle \quad (13)$$

$$= \left\{ \frac{1}{\sqrt{n!}}\hat{a}^\dagger\hat{a}(\hat{a}^\dagger)^{n-1} + \frac{1}{\sqrt{n!}}(\hat{a}^\dagger)^{n-1} \right\} |0\rangle \quad (14)$$

$$= \left\{ \frac{1}{\sqrt{n!}}\hat{a}^\dagger\hat{a}\hat{a}^\dagger(\hat{a}^\dagger)^{n-2} + \frac{1}{\sqrt{n!}}(\hat{a}^\dagger)^{n-1} \right\} |0\rangle \quad (15)$$

$$= \left\{ \frac{1}{\sqrt{n!}}\hat{a}^\dagger(\hat{a}^\dagger\hat{a} + 1)(\hat{a}^\dagger)^{n-2} + \frac{1}{\sqrt{n!}}(\hat{a}^\dagger)^{n-1} \right\} |0\rangle \quad (16)$$

$$= \left\{ \frac{1}{\sqrt{n!}}(\hat{a}^\dagger)^2\hat{a}(\hat{a}^\dagger)^{n-2} + 2 \left[\frac{1}{\sqrt{n!}}(\hat{a}^\dagger)^{n-1} \right] \right\} |0\rangle \quad (17)$$

このように、交換関係 $[\hat{a}, \hat{a}^\dagger] = 1$ をを用いて、展開していくと結局、

$$\hat{a}|n\rangle = \left\{ \frac{1}{\sqrt{n!}}(\hat{a}^\dagger)^n\hat{a} + \frac{n}{\sqrt{n!}}(\hat{a}^\dagger)^{n-1} \right\} |0\rangle \quad (18)$$

$\hat{a}|0\rangle = 0$ であるので、(19) は、

$$\hat{a}|n\rangle = \frac{n}{\sqrt{n!}}(\hat{a}^\dagger)^{n-1}|0\rangle \quad (19)$$

となる。

2) で求めた、固有ベクトルで展開された $|0(a)\rangle$ に、 \hat{a} を作用すると、

$$\hat{a}|0(a)\rangle = \exp\left(\frac{a}{2\sqrt{2}x_0}\right) \sum_{n=0}^{\infty} \left(\frac{a}{\sqrt{2}x_0}\right)^n \frac{1}{\sqrt{n!}}\hat{a}|n\rangle \quad (20)$$

(20) を代入すると、

$$\begin{aligned} \hat{a}|0(a)\rangle &= \exp\left(\frac{a}{2\sqrt{2}x_0}\right) \sum_{n=0}^{\infty} \left(\frac{a}{\sqrt{2}x_0}\right)^n \frac{1}{\sqrt{n!}} \frac{n}{\sqrt{n!}} (\hat{a}^\dagger)^{n-1} |0\rangle \\ &= \frac{a}{\sqrt{2}x_0} \exp\left(\frac{a}{2\sqrt{2}x_0}\right) \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{(n-1)!}} \frac{1}{\sqrt{(n-1)!}} \left(\frac{a}{\sqrt{2}x_0}\right)^{n-1} (\hat{a}^\dagger)^{n-1} |0\rangle \end{aligned} \quad (21)$$

(9) の n を $n-1$ にかえても結果は変わらないので、これと (22) を比較することで、

$$\hat{a}|0(a)\rangle = \frac{a}{\sqrt{2}x_0} |0(a)\rangle \quad (23)$$

となることがわかる。

4

温度 T が一定なので、カノニカル分布によって扱う。 (k :ボルツマン定数)

(1)

1つのスピンの分配関数 Z_1 は、

$$Z_1 = \exp \left\{ -\frac{1}{kT} \left[-g\mu_B H \left(\frac{1}{2} \right) \right] \right\} + \exp \left\{ -\frac{1}{kT} \left[-g\mu_B H \left(-\frac{1}{2} \right) \right] \right\} \quad (1)$$

$$= \exp \left(\frac{g\mu_B H}{2kT} \right) + \exp \left(-\frac{g\mu_B H}{2kT} \right) \quad (2)$$

$$= 2 \cosh \left(\frac{g\mu_B H}{2kT} \right) \quad (3)$$

おのこのスピンは独立しているので、全系の分配関数は、1つのスピンに関する分配関数の N 乗に等しいから、

$$Z = \left[2 \cosh \left(\frac{g\mu_B H}{2kT} \right) \right]^N \quad (4)$$

(2)

ヘルムホルツの自由エネルギーを F とすると、

$$F = -kT \log Z \quad (5)$$

$$= -NkT \log \left[2 \cosh \left(\frac{g\mu_B H}{2kT} \right) \right] \quad (6)$$

(3)

$$M = - \left(\frac{\partial F}{\partial H} \right)_T \quad (7)$$

$$= - \left[-NkT \left(\frac{2 \frac{g\mu_B}{2kT} \sinh \left(\frac{g\mu_B H}{2kT} \right)}{2 \cosh \left(\frac{g\mu_B H}{2kT} \right)} \right) \right] \quad (8)$$

$$= \frac{Ng\mu_B}{2} \tanh \left(\frac{g\mu_B H}{2kT} \right) \quad (9)$$

よって、磁気モーメント M は、 H が増加すると増加し、 T が増加すると減少する。

5

問 1

黒体輻射に関するプランクのエネルギー密度 $u(\nu, T)$ (ν : 振動数 T : 温度) の公式は、エネルギーを $\varepsilon = h\nu$ を単位として、その整数倍であると仮定するとボルツマンの確率分布より、

$$\langle E \rangle = \frac{\sum_{n=0}^{\infty} nh\nu e^{-\frac{nh\nu}{kT}}}{\sum_{n=0}^{\infty} e^{-\frac{nh\nu}{kT}}} \quad (1)$$

$$= \frac{h\nu}{e^{\frac{nh\nu}{kT}} - 1} \quad (2)$$

であるから、モードの数を $\frac{8\pi\nu^2}{c^3}$ とすると、

$$u(\nu, T) = \frac{8\pi h}{c^3} \frac{\nu^3}{e^{\frac{nh\nu}{kT}} - 1} \quad (3)$$

となる。つまり、エネルギーが $E = h\nu$ をもった、量子として振る舞うという仮説が、エネルギー量子仮説である。

問 2

光電効果を説明するためにアインシュタインは、電磁放射自体がエネルギー $E = h\nu$ をもつ量子の集まりであるという仮説をたてた。つまり、電磁波は $E = h\nu$ をもつ粒子のような振る舞いをする。これが、光量子仮説である。

問 3

光電効果による光電子の最低エネルギーは、照射する光 (電磁波) の強度、時間に関係が無く振動数 (波長) に関係している。つまり、どんなに、強い光を長時間照射しても、振動数がある一定以上にならないと光電子は飛び出さない。しかし、光を振動数に関連したエネルギーをもつ粒子と考えると、ある一定以上の振動数 (=エネルギー) がないと、光電子が放出されないことがわかる。よって、光電効果は、光の粒子性を示す現象である。